

戦後の図書館めぐり

シニアライフアドバイザー 小川 怜子



勉強の場が欲しい

戦争ですべてを失った後の生活は困窮を極めていました。クジでやっと当たった川崎の市営住宅は6畳と4畳半に台所だけで、7人家族が暮らすにはギュウ詰めでした。高校生になっていた私は勉強の場が欲しいと強く思うようになり、図書館めぐりが始まりました。私にとって当時、本は唯一開かれた世界でした。

多摩川の民家の仮の図書館

多摩川のデルタ地帯に焼け残った民家がポツンと仮の図書室になっていました。平屋建ての庭に藤棚が緑陰を作り、水田や蓮田が前面に広がって風が吹き渡っていました。蔵書はちょっぴりでしたが、ここは焼跡の中のオアシスで、ひととき田舎に戻ったような気分になれる、誰にも知られたくない平和な場所でした。

市立図書館の新設

戦争で女学校は全焼し、男子中学校に間借りとなり、私は図書館に入りびたりで多くの時間を過ごしていました。やがて市立図書館が新設されると朝から長蛇の列でしたが、コッペパンとお茶持参で終日立てこもりましたが、利用者同士の触れ合いもあり仲間もできました。

女性専用図書館

その後、働きながら東京の短大英文科に通うようになり、夜も開いている御茶ノ水駅近くの女性専用図書館を見つけて通いました。こじんまりした静かな環境で、ストーブの上でやかんの湯気が吹く光景は今でも懐かしい思い出です。

神田の本屋街に下る途中に明治大学の自習室があり、誰でも出入り自由で午後によく使わせてもらいました。近くに「山の上ホテル」があり静かで快適な居場所だったので。

東大の図書館に潜り込んで

男子校との交流で知り合った先輩が、幸運にも東大に入学した後は、図書館に入りびたりだと聞きました。夜も開いていて夕方には門番が引っ込んでしまうとの情報を得て、こっそりと

潜り込んだことがありました。東大の構内は木々がうっそうとしている中に建物がひっそりと建っており、夕暮れの三四郎池には小説の中の三四郎と美弥子が立っているような錯覚になりました。



図書館は大きな建物で利用者は少なくがらんとした中で、手元灯だけがわずかに光っていました。ひんやりした空間は何やら湿っぽい感じでしたが、それでもその静けさにひかれて、何回か忍び込んだことは忘れがたい思い出です。

翻訳の仕事で日比谷図書館通い

短大は苦労の末、かろうじて卒業できましたが、入学時に100名いた学生は32名になっていました。卒業したころ会社勤務は日比谷公園の真向かいにある本社勤めになりました。そんな中、出来が悪いのに何故か翻訳の仕事が非公式に2つ舞い込んできました。1つはアメリカから輸入開発中の電子レンジの料理レシピ。もう一つはアメリカの学会で発表された心臓集中治療システムの記録でした。

その頃、日比谷公園に近代的な日比谷図書館が完成して早朝からどっと人が押し寄せていましたが、夕方になると幾分空いてくるので、そこにこもって翻訳の仕事をしました。苦労して仕上げたのにレシピ集はボツになり、2つ目の学会の記録は毎晩閉館まで図書館で粘り、3か月もかかって仕上げました。ちなみに報酬はなくランチ代や志摩半島での学会のお土産としてパールのブローチをいただいただけです。この時代はそんなものでしたが、青春の思い出として一生懸命頑張った私の人生記録の断片です。